若手の会・ＮＢミーティング合同勉強会
議事要旨

１．開催概要

（１）日時

平成 29 年 10 月 26 日（木）17 時 00 分～18 時 30 分

（２）会場

ＴＫＰガーデンシティプレミアム名古屋駅新幹線口　バンケットルーム５－Ｃ

（３）講師

国土交通省中部地方整備局建政部　公園調整官　　笠間　三生　氏

（４）テーマ

国営木曽三川公園について

２．議事要旨

（１）国営公園の整備に至った歴史、背景

そもそも「公園とは何か」という話であるが、元々の発想は家づくりと同じである。日本もまちづくりで近代国家を作ろうという考えの中、まちの顔が必要という事が 1 つあり、公園を整備しようという動きがあった。家に置き換えた場合、いわゆるリビングや応接間としての公園である。

首里城公園や海洋博公園は応接間としての公園と考えており、外から来た方に対して「この地域はこういう歴史を持っている」と出迎えるタイプの公園である。

もう 1 つはリビングとしての公園である。昭和 51 年というのは高度成長期であり、これまでの生活に比べて自然に触れる機会が少なくなり、人とコミュニケーションを図る事が無くなりかねないという事もあり、単に仕事をして家に帰るだけでは人は疲れてしまう。

そのため、まち全体としてのリビングを作り、交流の場を設ける必要があるという考えから公園を整備している。

戦後復興で新しくまちが作られバラック小屋を建て替えていく中、リビング的なスペースをつくっていかないと人は息苦しくなる。海外の公園を見に行った事のある美術家は、日本には何人もいない中、公園とはどういうものでどう作るのかが分かっていなかった。そこで、全国を 10 地域に分け、その中でそれぞれ 1～2 個のモデルとなる公園を国が整備して「公園とはこういうものである」と作り方を研究しながら進めていこうという事で、昭和 51 年に都市公園法を改正し、国自ら国営公園を整備するという条文を盛り込んだ。

（2）木曽三川公園が国営公園に選定された背景

中部地方については、愛知、三重、岐阜、静岡、長野県のどこに作る事が良いのか誘致合戦になった。中部地方は、兵器を製造する工場が存在し、実際に長野は空爆を受けている。また、国有地がない中どこに作る事が良いのか、今後人口が増加していく中での平等性という観点から、県境で同じような整備をするという事であれば、岐阜、愛知、三重県には説明ができ、また、河川敷については河川改修を行うと洪水が発生しなくなり、新しく平坦地が生み出されるため有効活用しないともったいないという話から、現在の位置に本公園を作る事となった。

（3）木曽三川公園の概要

木曽三川公園は、愛知県と三重県の境、三重県と岐阜県の境、岐阜県と愛知県の境に位置しており、木曽川、揖斐川、長良川の 3 つの川がある。昔は洪水になるとどこに水が流れる分からないため橋がなく、木曽川は渡し船で渡っていた。

本公園の都市計画面積は非常に大きく約 6,100ha であるが、実際には川沿いの公園であるため、普段は水が流れていないが洪水時に堤防の上まで水が上昇した際に水面になる箇所と、一部堤防に隣接して土地がある箇所を公園としており、「川の公園」というコンセプトになる。

本公園は大半が河川敷であるため無料の公園である。一部、タワーは有料であるが。昨年度は 965 万人が来園している。30 年前に下流の木曽三川公園センターを開園し、全体で 469ha を国で整備し、全体の約 81％まで事業が進んでいる状況である。

本公園の基本計画において、上流から下流まで約 50km の間に点在している公園であるが、コンセプトとして、「自然環境への理解」、「歴史への理解」、「広域への貢献」の 3 つを基本理念とし、それに対して人が触れる事ができ、また、公園だけではなくその周辺のまちづくりという連携、レクリエーションの視点を持たせている。

歴史的にも重要な川であるため、川に関する歴史、自然をメインコンセプトとしている。川にどういう生物がいるのかという地域の特徴、また、洪水があると今でも 2 市が沈むと言われている地形の中、災害時にどのように本公園を活用するのか、そのような話を含めて歴史文化と言っている。

木曽三川とは木曽川が 3 つに分岐して合流するという事と、木曽、長良、揖斐の 3 つの川でそれぞれ分かれている事から命名された。

年間来園者数は約 1,000 万人。1 つは上流にタワーがありそこが有名な地区である（138 タワーパーク）。下流にも 1 つタワーがあり、木曽、長良、揖斐川が見える地区がある（木曽三川公園センター）。河川環境楽園は愛知県と岐阜県の境であり、エリア全体を木曽三川のテーマパークにしていて上流から下流のミニチュアを展示している。

愛知県には、砂が河川敷で露出している河畔砂丘という砂丘があるが、そこを活用して砂像を作るイベントを行っている地区がある（ワイルドネイチャープラザ）。

（4）今後の重点的な取組み

基本的には水辺の環境と歴史文化資源を活かす事と、最初の基本計画には特出ししなかったがスポーツの振興を挙げている。河川敷は平らなので、砂浜の反対側ではビーチバレーのコートを整備したり、川でレガッタ競技を行っている。国営公園の特徴であるが、一部分をスポーツに使用しても他の部分で歴史文化の説明が可能である事から、異なる活用を行っている。

次に、地域と連携して１つの公園としての一体感を創出するとあるが、これから取組む必要があり、地域の防災減災が該当する。話は脱線するが、この前の熊本の震災の際、人々は車に乗りまず公園に避難したという事があり、これまでの震災とは異なり、車で避難するという事が想定外であった。災害時は公園に行けばなんとかなるだろうという意識が結構人々は持っている。防災に関して、各市町の地域防災計画に避難場所として位置付けている。

外国人観光客について、本公園は沖縄の公園とは異なり、家族のためのいわゆるリビングとしての公園であるため、外国人誘客は考えていない。外国人、障がい者も含め誰もが訪れて楽しめる公園にしようとしている所である。

（5）各拠点の整備・管理運営方針

三派川地区は、木曽川が南と中央と北の３本に分流しまた合流している地区であり、岐阜県各務原市川島笠田町という町があるが、川の中であるが人が生活している町がある。

三派川地区では歴史文化や自然環境、また、日本の中でも珍しい地形という所をもとに整備しており、４地区開園している。その中のフラワーパーク江南については、歴史的に花が有名である事から、歴史文化として花を取り上げている。また、138 タワーパークについては、タワーを建設し全体の景色を見てもらう事を考え建設している。

河川公園で１つのテーマと申し上げたが､切り出し方をそれぞれの自治体と調整した結果、違う形でつくっている。

フラワーパーク江南では花に関する取組みを多く実施しているが、公園維持管理費の範囲内でやっても立派なことはできず、他の地区の維持管理費を減らさなくてはいけない。ここでは整備時点から、江南市のボランティア（フラワーパーク江南友の会）の方が関わって色々と行って頂いている。

各務原アウトドアフィールドは、洪水があると浸水してしまう位置にある河川敷の広い原っぱであり、年に 1、2 回程度気球を揚げたり、バイクやモトクロスの大会を行っている。

河川環境楽園は、岐阜県営の施設と国の施設が複合して整備された公園となっている県営部分には観覧車もあり、国営部分には木曽川水園がある。

138 タワーパークは、138mというタワーの高さと、一宮市の 138 をかけている。河川や全体の景色を見ることができる。

中央水郷地区では、川の中でウィンドサーフィンを行ったり、平らな箇所でバーベキューやサッカー、砂丘のところでは砂を使ったイベントを行っている。河川敷では珍しいが、砂丘にいる生物の保全と自然系のアクティビティをよく行っている。

ワイルドネイチャープラザ（サリオパーク祖父江）は、国、県、市の公園３つを合わせてワイルドネイチャープラザと呼んでおり、自然保全とスポーツは国、施設は県、少年自然の家は市という複合型である。

桜堤サブセンター・木曽長良背割堤においても、河川敷でバーベキューをやっており、ここでは人口的に川が混ざり合わないようにつくられた堤が 1km ほど存在する。昔、川沿いに桜が植えられていたのは単に綺麗だからというだけでなく、桜を観に人が集まると堤防が踏み固められて頑丈になるという理由で植えており、こういう取組みは江戸時代まで結構あった。ここでは江戸時代に植えられた桜が残っており、これを活用して、今後サイクリングロードの整備を検討している。ただ、このあたりはジャングルのように緑が茂っており、自転車で堤防から落下した場合どう救助するかという問題もあり、現在検討している。また、バードサンクチュアリでもあり、岐阜県の山や海の鳥を両方観察する事ができる。

長良川サービスセンターには艇庫があり、水面を利用してボートレースやレガッタの大会が行われている。また、カヤックの体験や練習会を行ったり、河川敷を利用してビーチバレーが行われている。

アクアワールド水郷パークセンターは川と川の間に位置し、船を使って田んぼを耕していた場所で、田んぼの復元を行っている。

木曽三川公園センターは最初に開園した部分であり、タワーを建設している。また、この地域には輪中という川の中洲に残される事を前提とした家屋があったが、特徴がある景観のため移築、展示を行っている。また、木曽三川の歴史文化などを紹介している。

東海広場・鵜戸川は、河川の両側に広がる緑の草原である。サッカーグラウンドやパークゴルフ、デイキャンプ場でバーベキューを行ったり、また、リレーマラソンという１人 2km を交代で走り、全員で合計 42.195ｋｍ走るというマラソン大会も行っている。

船頭平河川公園は昔からハスで有名な地域であり、長良川と木曽川の間を船で移動するときに使用する閘門が現存し、今も釣り人の方が使用されている。

カルチャービレッジは輪中になっている。大きなドームを建設しているが、ドームの下は4m程度盛り上げているため浸水時にも地域の避難場所として活用でき、テニスや地域・企業の運動会、フットサルを行うスポーツの場所でもある。

河口地区について、桑名七里の渡し地区は東海道の歴史的な地区であり、七里の渡しという所から船が発着し、東海道の宿から宿まで移動する拠点であった。

また、大正時代に地域の実業家が住んでいた、ジョサイア・コンドルが設計した六華苑という歴史ある洋風建築物や、桑名城の跡地など歴史的な資源を活用した公園づくりを地元と進めている。

（６）ネットワーク形成のための取組み

全体の広域ネットワークとして取り組んでいるものとしては、サイクリングコースが挙げられる。犬山市から一宮市まで左岸側をサイクリングコースとし、最終的には河口まで繋げようと考えている。そこと各地域の中の博物館を繋げつつ、下流にも伸ばしていこうと地元

と調整している。

エコロジカルネットワークとして、鳥や希少植物をどう補てんしていくのかといった取組みを行っている。地域の観光振興としては歴史もあり、川付近では祭りも開催されており、お互いに場所を貸したり協力し合っている。

広域防災については、公園が堤外地や高台、輪中の位置は盛り上げて浸水しないような計画で整備しているため、各自治体と調整して災害時の計画に記載してもらうなど行っている。

（7）今後５年間の事業による効果

今後５年間については、人をどのように増やしていくのかという部分について、バリアフリーや海外観光客受入れの話をしつつ、地域の活性化についてはマルシェ（朝市）、ドッグマルシェ（犬関係のグッズ販売）や仮設のドッグランを作り、好評であった。

また、防災に関しては、自衛隊が使用する箇所もあるので、自衛隊とも調整しつつ進めている。

３．事前質問に対する回答

①構想から計画づくり、整備に至るまでの経緯について教えてください。また、国営公園としての位置づけに至るまでの経緯について教えてください。

→昭和 51 年の都市公園法改正に伴い、国の方でモデルとなる公園を整備しようという方針のもと、国が勉強しながら進めていく中、中部地方で整備する公園として決定した。

②各拠点について、現在のテーマに至った経緯について教えてください。

→各県で誘致合戦となり、結果的に河川がテーマとなった。そこで、リビングとしての公園として整備する方向性となった。

③計画づくりから整備着手段階における地元の意向はどのような状況でしたか。また、反対者に対しての対応はどうなされましたか。

→高度成長期であったため、どうやって日本を復興していこうかという思想が主であり反対はなかった。なぜここまで整備する必要があるのか、という話が個別に地権者からあったらしいが、そこは丁寧に対応して納得頂いたとの事である。

④国営木曽三川公園は１箇所の集約型ではなく、広範囲にネットワーク型で広がっている大規模公園という認識を我々は持っていますが、その事によるメリット・デメリットがあれば教えてください。

→自然、歴史文化という話では綺麗に聞こえるが、防災の意識が自治体により異なっており、整備イメージも異なるため、全体として統一感があるように見えない点が悩みである。また、河川敷の公園は公共交通が弱く、自家用車でないと行く事が難しい。そのため、なるべく駅近くの歴史的な拠点の間を繋ぐという課題がある。

⑤公園を起因とする経済効果として、具体的にどのような事がありますか。

→積極的に経済効果は計測していない。フリーマーケットやスポーツイベント等で単純に発展している。リビングとして人が集まってくる公園として、他府県からも来園頂いている。

⑥大規模公園整備が行われる際、地主、市民として留意すべき事項についてアドバイスを頂けますでしょうか。

→年間 965 万人の来園者がいる事については、国土交通省の力ではない。公園を管理して盛り上げる側はイベント業者や自治会等であるため、最初から立派なものをつくらなくても良い。味付け等は市民、ボランティアである。花を最初に植えるのは国が行うが、毎年同一レベルで植えるのは予算の関係上難しい。現在は江南市のボランティアの方々のおかげで、地域でも有名な花のフェステイバルになっている。

公園をどう活用したいかという点について、管理者側でない所にボールを持たせて、最初から組み込んでいく事が良いと考える。また、整備する公園がリビングなのか応接室なのか、しっかりと考えておく事が大事である。大規模な公園であれば、公園内で方向性を分ける事も可能である。

私は以前、国営ひたち海浜公園に携わった事があるが、ひたち海浜公園は現在年間200 万人の来園者であり、来園者が多いのは東海村ＪＣＯ臨界事故をきっかけに、「リビング」から「応接間」としての公園に方向性を変更したためである。事故により観光客の減少を減らすため、花を植えて人を呼ぼうと考え、四季折々いつでも花を見る事ができる公園という、他では見えない景色を作る事を意識して整備を行った。

⑦現在、市内・県内・県外の人はどの程度来訪されていますか。

→岐阜、愛知、三重県の人は訪れるが、それ以外の県民はあまり訪れない。木曽三川公園の話題については、やはり中部圏のマスコミが流す事が多いからである。

⑧観光客を呼び込むための仕掛け等、現在取り組まれている事があれば教えてください。

→特にない。過去、水害被害が大きい事もあり、防災の取組みを意識している。また、リビング的な取組みについては施行しているという自負がある。本公園ではバーベキューが最近流行っており、本格アウトドアバーベキューとして地域の中では１番有名である。

⑨市民と協働で進められている取組みがございましたら、その内容と発現効果について教えてください。また、維持管理にかかるボランティア、ＮＰＯ法人との協働はどの程度ございますか。

→歴史文化についての説明は、ガイドボランティアを市民と協働で進めている。公園あるいは水辺を使ったイベントでは、サンドフェスタを含め各自治体が年間 1、2 回利用している。

⑩今後のビジョンについて教えてください。

→拠点の数を増やす事は考えていない。また、本公園は車でないと行きづらい公園という認識がなされているため、レンタサイクルなど車でなくとも訪れる事ができるような公園にしたいと考えている。

⑪公園整備の際に既存の自然資源（緑や水、地下空洞など）や文化財等の活用または保全して整備した箇所がございましたら経緯等を教えて下さい。

→輪中やパークセンター、木曽川の成り立ちなどをご覧頂きたい。

４．質疑応答

質問：宜野湾市においても 100ha の大規模公園を想定している。100ha のネットワーク型公園にした場合、１つのエリアが小さくなるが果たして魅力が出てくるのかどうか、木曽三川公園と比べて面積が小さいため疑問に思った。

回答：中央水郷地区について、ワイルドネイチャープラザの河畔砂丘以外は間延びしている。ただ、平らな土地が比較的きれいに確保できるので、スポーツやバーベキュー利用が多くなされている。レガッタコースやサンドコート、テニスコートなど色々記載しているが、地形からしてみれば整備レベルは同程度である。いついってもどこかのグランドが空いているという所があるため、思い立った時に活用できる受入キャパの広さが売りであり、間延びする所を埋めているのが実態である。

普天間で考えた場合、100ha の中で顔となる所で、例えば地域のスポーツや何かの大会の決勝戦を誘致し、そこで用が足りるあるいは他の公園と分担しつつやっていかないと、大きい公園の場合間延びすると考えられる。

需要がない所に需要を創るという事は、予算があれば管理者は公園を綺麗に作る事ができるが、人の集まる公園を作る事は、作ってからでは難しく、利用者ありきで公園を検討していかないといけない。面積ありきでは難しい。

このエリアはこういう利用方法がメインと考えて多目的グラウンドを整備し、災害時にはヘリポートとして活用できる等、365 日何に使われるか考えないと今の時代には向かない。

質問：熊本の震災で避難に車を使用していたという事であるが、防災を考慮して空間を開けた部分はあるのか。

回答：ない。平場が多い地域であるため、大半の場所は利用できる。それよりも、震災時に浸水する可能性があるため、浸水しない場所を確保した。また、普段自治体のイベントで活用しているため、「何かあったらここに来てください」と言った時に、川に囲まれた地域の人は皆分かってくれている。

私がバーベキューを推している理由としては、人が集まるという事もあるが、「ここでバーベキューができる」と普段から認識されていると、「災害時には炊き出しをやっているかも」と地域の人が思って頂けるからである。

また、災害用に資材を備蓄しても１年くらいで使わず捨て、新しい資材を購入する事になるが、バーベキュー用の資材を備蓄していると、自動的に災害時使用できる資材等が備蓄できている事になる。

質問：138 タワーパークについて、整備に見合っただけの効果はあったのか。

回答：当初はＵＲの管理であったが、２ 年程前から一宮市が管理している。利用料は徴収しているが、建設費をペイするまでには至っていない。しかし、このタワーを見ると「一宮市に戻ってきた」と地域の人達が思うようなシンボルとなっている。いわゆる広告代と考えている。シンボルを作るかどうかについては、現地の状況や維持管理、費用的な事もあると思うが。

質問：地元の観光施設などから声は上がってきているか。

回答：今年の都市公園法改正に伴い、バーベキューや店舗、土産物屋を出店しても良いかという話は上がってきている。また、本公園と連携できないかという話もある。
犬山市では、公園を訪れる人が犬山市の名物を買って帰る事のできる店を出すことはできないかという話もある。公園でスポーツやサイクリング等を楽しんだ後、すぐ帰るのでは地元にとって経済効果はない。公園に来た人がお金を落とす仕組みを作れないかと考えている。

質問：本公園は３県に跨っているが、災害時における各自治体での境界ラインの取決めはあるのか。

回答：広域協定を自衛隊と結んでいる。高速道路と直結しているため、そこで自衛隊の災害本部の展開が可能である。また、災害対応部局との連絡先は全部押さえている。

質問：タワー以外の有料区域はあるのか。

回答：ない。タワー、飲食、展示施設の一部のみが有料である。有料エリアを設ける場合、柵で囲む必要がある。川に柵を作るとした場合、堤防の上に設けなる必要があるし、洪水時には木が柵に引っかかる等考えられる。そのため、設けても仕方ないと考え、有料区域は設けていない。

質問：今後、新たに国営公園を整備するビジョンはあるのか。

回答：現在そのような話はない。最近、地区として拡大した公園としては、奈良の飛鳥歴史公園である。１つの国家記念行事として記念公園がないかと考えている。
また、東日本大震災で国が祈念施設を整備するという話もあったが、新たな遺跡が発見されたという場合は考えられる。新規の国営公園という話は、国の予算もない中で難しいと考える。

以　上